

最 終 試 験 の 結 果 の 要 旨

神奈川歯科大学大学院歯学研究科 咀嚼機能制御補綴 学講座 番家 雅子 に
対する最終試験は、主査 槻木 恵一 教授、副査 玉置 勝司 教授、
副査 荒川 浩久 教授により、主論文ならびに関連事項につき口頭試問を
もって行われた。

その結果、合格と認めた。

主 査 教 授 槻木 恵一

副 査 教 授 玉置勝久

副 査 教 授 荒川 浩久

論 文 審 査 要 旨

口腔不快症状の改善に与える義歯治療の影響

**Influence of the denture treatment
on the improvement of oral discomfort**

神奈川歯科大学大学院歯学研究科

咀嚼機能制御補綴学講座 番 家 雅 子

(指 導： 木本 克彦 教授)

主 査 教 授 槻木 恵一

副 査 教 授 玉置 勝司

副 査 教 授 荒川 浩久

論文審査要旨

高齢社会が急速に進み、口腔の健康維持が健康長寿に重要な役割を果たしていることから、歯科医療の重要性は益々高まっている。申請者は、これまでに高齢化と関連し口腔内の不快症状が増えることに着目し、その改善に義歯治療の有効性が一部症例で認められ、症例報告として示してきた。口腔内不快症状には、乾燥感、灼熱感、味覚異常などがあるが、これらの症状の蔓延は、食事障害となり高齢者の健康長寿に悪い影響が出ることは疑いない。本論文では、これまでの経験を踏まえ口腔不快症状の改善に対する義歯治療の有効性について、症例を集積して検討したものであり、高度先進臨床歯科医養成コースの求める臨床研究に相応しいテーマである。さらに、義歯治療の意義を深めることが出来る研究であり評価に値する。

本研究は、患者を対象とする研究デザインであり、正当な手続きで倫理審査が行われた。被験者 48 名に対して、口腔不快症状の聞き取り、口腔内症状（視診）、安静時・刺激時唾液の測定を中心に、術前と術後で比較しており、統計解析には対応のある t 検定が用いられている。治療方法は、現義歯調整のみと新義歯作製であり、日常の義歯治療を重視した設定である。さらに、5つの「口腔不快症状」と「口腔内症状」に対する説明変数として、年齢、性、全身疾患、義歯治療の種類（現義歯調整のみの被験者に対する新義歯を製作した被験者の評価）、安静時唾液流出量の変化および刺激時唾液流出量の変化を、また、「安静時唾液流出量」と「刺激時唾液流出量」には、年齢、性、全身疾患および義歯治療の種類（現義歯調整のみの被験者に対する新義歯を製作した被験者の評価）を説明変数として設定し、重回帰分析を行い影響因子検討している。本審査委員会では、統計解析についてパラメーターの正規性など問題ないことを確認している。

義歯治療後に口腔不快症状、口腔内症状、安静時唾液流出量および刺激時唾液流出量の全てに改善が認められた。また、口腔内の各不快症状に対して、年齢、性、全身疾患（服薬）、義歯治療の種類（現義歯調整のみの被験者に対する新義歯を製作した被験者）、唾液流出量が影響し、特に刺激時唾液流出量が大きく関与していた。さらに、義歯治療の中でも新義歯の製作は特に刺激時唾液流出量の改善を促し、この刺激時唾液流出量が、口腔乾燥感、口腔灼熱感や痛み、口腔内症状の改善に影響している事が明快に示され、興味深い結果が得られた。

本研究は、新義歯の効果の一つとして唾液量の増加に関連するという知見を明らかにした点で非常に重要である。さらに、新義歯の製作が唾液量の増加に関与し口腔不快症状の改善につながることは、義歯治療が咀嚼機能の改善だけでなく、口腔不快症状の改善に対しても有効である可能性を示しており、これからの補綴医療に貢献する論文である点を高く評価した。また、申請者は審査委員による質問にも明快に回答した。以上により本審査委員会は、申請者が博士（臨床歯学）の学位に十分値するものと認めた。